

九鬼周造の生の哲学と田辺元の死の哲学

織田和明

一 はじめに

九鬼周造（一八八八—一九四一）と田辺元（一八八五—一九六二）は京都帝国大学の教授を務めたポスト西田幾多郎（一八七〇—一九四五）世代を代表する日本の哲学者である。彼らは当時の西洋哲学の潮流や東洋思想、そして刻々と進展する西田哲学を踏まえて自身の哲学を形成していく。両者ともに同一律にこだわる哲学を乗り越えることを目標として、抽象的な思考を批判し、具体的であることを優れた哲学のメルクマールとする。^①

しかし具体的な哲学として両者が提示したものはむしろ対照的である。田辺はヘーゲルに深く学び、弁証法を駆使した「種の論理」を構築するが、九鬼は当時の現代思想であったベルクソンやハイデガーの哲学に親しみ、従来 of 西洋哲学では十分に

議論されてこなかった偶然性を論じることによって「個」によりそった「生の哲学」を形作っていく。田辺の議論の核心にあるのは絶対無であるが、九鬼は原始偶然であり、それは無にさらされているとはいえず、有である。両者は京大退官後にますます活発に展開する西田哲学を受けて自身の思索を深めていくが、田辺は西田哲学に反発しながら自身の哲学を形成する一方、九鬼は西田哲学を自身の偶然性論に強いて引き付けて組み込んでいく。田辺は九鬼の偶然性論に対してネガティブな評価と九鬼には受け入れがたいアドバイスを与える。九鬼は田辺のアドバイスとは逆に偶然性の哲学を深めていく。両者の仲が悪かったということはないようだが、^②哲学上は対立したまま、九鬼は一九四一年に夭折する。

その後田辺は戦争中期までは全体主義的な議論を展開するが、一九四四年以降はそれに対する反省から宗教哲学へ主軸を

移し、懺悔道の哲学を経て晩年には「死の哲学」に至る。檀垣立哉^③は晩年の田辺哲学が西田哲学と接近していると指摘しているが、宗教は九鬼の偶然性論の行き着く先であり、ここに九鬼の哲学との比較可能性を見ることができよう^④。北軽井沢に隠居する田辺は、最愛の妻との死別を経て「絶対無即愛による死即復活の実存協同」を主張する死の哲学に到達する。それは九鬼の偶然性論の中心にある「邂逅」と近接したテーマである。しかしそれでも両者の間には死の弁証法と生の哲学の対立があるだろう。

本稿ではまず一九三二年の九鬼と田辺の間の往復書簡における両者の直接対決を確認し、次に九鬼周造の生の哲学と田辺元の死の哲学を比較する。田辺の最後の著作である『マラルメ覚書』(一九六一)は死の哲学の一連のテキストの中でも偶然を論じている点に特色がある。それを九鬼の偶然概念と比較することによって、両者の対照的な性格を把握し、九鬼の生の哲学と田辺の死の哲学の比較の糸口とする。そして九鬼の生の哲学(一九三〇年代)と田辺の死の哲学(一九五六—一九六二)の全体的な比較を行う。

二 田辺は九鬼の偶然性論をどのように読んだか

九鬼は一九三二年に博士論文「偶然性」を京都帝国大学に提出し、博士号を授与される。審査会の後に審査を担当した田辺と九鬼の間で交わされた書簡が残されており、そこには田辺に

よる九鬼の偶然性の哲学への厳しい批判と、九鬼による返答が残されている。

当時の田辺はカントの目的論、ヘーゲルの弁証法の研究を経て、後年の種の論理を準備している段階にある。田辺は否定的超越的合目的性、つまり超越的全体の無、によって限定される目的なき目的、によって偶然を必然化して道徳的実践を明らかにするべきだと主張する。田辺の目には九鬼の偶然論は個の瞬間的な生の充実としての美的合目的性しか考慮していないように映ったようである。ゆえに偶然を絶対的な普遍によって必然化して善へと至る道の研究を九鬼に求める^⑥。

しかしこの要求は九鬼にとって受け入れがたいものである^⑦。九鬼は無ではなく有の立場から偶然性の哲学を構築したのであり、超越的全体の無によって個物が限定されてしまうような議論は偶然性の問題にはそぐわない^⑧。九鬼は田辺の批判を受けてもなお絶対無ではなく原始偶然を根底に据えた哲学を主張し続ける^⑨。そのような九鬼の哲学では普遍的な善よりも個物の偶然の調和が織りなす美の方が重要である。九鬼は偶然性を偶然性として突き詰め、必然と偶然が偶々調和する境地を目指す^⑩。そして偶然に存在する個物の不安定さを肯定し、現状を受け止めて「目的なき目的」としての理想へ向かって行為を形成していく^⑪までを『偶然性の問題』では詳述し、田辺の批判に答えている^⑫。

小浜善信や古川雄嗣のように往復書簡の田辺の指摘によって

九鬼が必然性の意義を一層理解したと見る向きもあるが、¹³両者が書簡中で「目的なき合目的性」を真逆の意味で用いられていることに象徴されるように、この往復書簡はすれ違いに終わったものと解釈するべきだろう。社会的な媒介関係を基軸に据える田辺は九鬼の偶然性論のモチベーションをほとんど理解しなかったし、孤独な個物の立場から考える九鬼は田辺のアドバイスを受け入れなかった。田辺は「有ではなくて無」「美よりも善」「個よりも普遍」であるが、¹⁴九鬼はその真逆の「無ではなくて有」「善よりも美」「普遍よりも個」であった。

三 『マラルメ覚書』に見る田辺の偶然論と

九鬼の偶然性論

九鬼の死後、田辺は一九四四年の講演「懺悔道—Metanoetik¹⁵—」では「いわゆる否定を通さずに個を徹底的に生かし切る」¹⁷弁証法ではない立場を示して九鬼の哲学に接近するが、出版された『懺悔道の哲学』(一九四六)では弁証法の立場に立ち返る。科学哲学から政治時評にまで広がった田辺哲学も晩年には愛と死という実存にとって最も重大なテーマを論じる死の哲学へと収れんする。その晩年の田辺が熱心に取り組んだのはマラルメ文学の研究であった。

『マラルメ覚書』は一九六〇年に雑誌『声』に連載され、一九六一年に書籍として出版された。連載後に田辺は脑梗塞に倒れて入院し、一九六二年に亡くなるので、これが最後の著作と

なった。この遺著において田辺はマラルメが一八六〇年代後半から七〇年代前半にかけて執筆した未完の哲学小説「イジチュール」と一八九七年発表の象徴詩「双賽一擲」¹⁸を読解しながら自分の哲学を論じている。田辺は「イジチュール」は弁証論の立場に留まったために生と死のアンチノミーに直面して頓挫してしまっただが、「双賽一擲」は絶対無即愛の弁証法の立場に至ったために成功したと読み解く。

マラルメ文学に田辺哲学が重なっているのでテキストは複雑であるが、全体を貫くモチーフはシンプルである。偶然(未来)と必然(過去)が絶対無即愛の弁証法によって死即復活の実存協同による愛の統一を成し遂げる。死は未来に訪れる絶対偶然であるが、それを自覚して積極的に引き受けることによって絶対無即愛の弁証法的転換が開かれる。¹⁹このモチーフを田辺は「イジチュール」と「双賽一擲」を読解しながら幾度も繰り返す。

絶対偶然を引き受ける、という九鬼の議論と近いように思われるかもしれないが、そうではない。田辺のいう偶然は「自由な未来」であるが、九鬼の偶然は現在における根拠不十分な存在を指す。「自由な未来」は九鬼の哲学の枠組みにおいては「可能」に位置付けられる。²⁰それゆえ田辺と九鬼では「揺らいでいるもの」が異なる。田辺にとっては未来が揺らぎの中にあるが、九鬼は現在こそが揺らぎの中にある。そして九鬼は形而上学的立場では時間をその都度無から生産される瞬間の「非連

「続の連続」とみなすので、結局のところ全てが揺らぎの中にある。共通点として両者ともに現在に世界の動力源、田辺は絶対無即愛、九鬼は原始偶然、を位置付けていることは指摘できるが、それでもなおその性格は随分異なる。田辺哲学における現在とは絶対無即愛の弁証法を行う揺るぎない力の場であるが、九鬼にとつての現在は無根拠に存在する力の点としての原始偶然であり、非存在としての無が背後に潜んでいる。

このように偶然を評価しているといっても田辺と九鬼の間には大きな溝がある。この差異を踏まえた上で、次節では田辺が直接死の哲学を論じているテキストを参照しながら九鬼の生の哲学と比較する。

四 晩期田辺の死の哲学

田辺は一九五〇年代後半以降、一九六二年の死去まで死の哲学の研究に取り組み、成果を「メモメント モリ」「禪源私解」「生の存在学か死の弁証法か」そして先述の『マラルメ覚書』等の論文で発表した。いずれも禅の公案の解釈やハイデガー哲学との対決を通して議論が展開される難解なテキストであるが、基本モチーフは一貫してシンプルで、絶対無即愛の弁証法によって死者は死即復活し、浄化されて高次の段階である死者と生者の実存協同に反復する、である。

田辺はキルケゴールやエックハルトといったキリスト教思想家のテキストを読み解きながら、キリストの復活をモチーフに

「死の哲学」を構想するが、結局はキリスト教の神は「在りて在るもの」と旧約聖書規定されていることやアリストテレス哲学の影響によって生の哲学と結びついていることを理由に否定弁証法の深みに達していないと評価し、禅宗の公案にこそ死の哲学が見出されるという結論に至る。しかし田辺の公案の解釈には強引な側面があり、またカトリックの聖徒の交わりが「実存協同」であるとも述べられている。ゆえに死の哲学の「実存協同」はカトリックや仏教に見られる生死の境を超える愛で結ばれた共同体に典型的に現れるものであり、田辺は公案にインスパイアされてその思想を発展させたとは評価すべきだろう。中でも田辺が詳説した実存協同は二つある。一つはプライベートな夫婦愛の共同体、もう一つはパブリックな師弟愛の共同体である。

まず夫婦愛としての実存協同は一九五六年二月一二日の野上弥生子宛書簡に見られる。この時期の田辺はキリストの復活をモチーフに死の哲学を構想し、私信にアイデアを記している段階である。翌年の一九五七年以降、一連の死の哲学に関する論考は執筆、公表されていく。

田辺はキルケゴールの『反復』読解を通じて自らの意志で神意に従って死んで無に帰した後に復活することによって、倍になって帰ってくるという「循環倍償」こそが「キリスト教の核心たる「死即復活」の「霊的体験」であると理解する。田辺は妻の死を経て、この「復活」概念を捉えることができたとい

う。

しかし妻の死は之を可能に致しました。もはや復活は、客観的自然現象としてでなく、愛に依って結ばれた人格の主体性に於て現れる靈的体験すなわち実存的内容として証されます。キリストの復活も、マグダラのマリヤが復活せる主の肉体に手を触れるつもりでそれを禁止せられ、ただ二人の天使を見たばかりでその言付けを聞いたに過ぎなかつたと伝えらるる如く、全くマリヤにとつての靈的体験に外なりません。この主体的実存内容としては、それは疑を容れない事実であります。小生にとつても、死せる妻は復活して常に小生の内に生きて居ります⁽²⁸⁾。

田辺は自身の主体的実存内容としての靈的体験の水準において「死せる妻は復活して常に小生の内に生きて居ります」と記している。つまりこの夫婦愛としての実存協同においては、キリストが復活したように、田辺の「愛」によって妻が田辺の内に復活し、絶対無即愛の弁証法によって実存協同へと反復されているのである。この夫婦愛の立場から見ると、死の哲学はキリストの復活を範とした亡き妻に対する情熱的な愛の表現であり、ここに喪の作業を見ることもできるだろう。加國尚志はこれを「生者の側」からの哲学であると指摘する⁽²⁹⁾。確かに、ここにおける「死せる妻の復活」は生ける田辺の主観的な靈的体験であつて、客観的な自然現象ではない。しかしそれが可能になるのは両者が共に生きていたところから続く愛の紐帯があつてこそ

ものであり、二人で共に作つてきた歴史性に裏打ちされていゝる。生ける田辺は一人ではなく、死者と間の歴史性を担い、復活させることによつて死せる妻との共同体をより強固に反復している。それは客観的には「生者の側」からの哲学にしか見えないかもしれないが、田辺の主体的実存内容としては、死者と共に発展していく哲学である。

夫婦愛の立場からの死の哲学は野上弥生子宛書簡というプライベートな書簡に記された家庭における死の哲学であり、生前は公開されなかつた。田辺が生前に公刊したのはパブリックな師弟愛の共同体としての死の哲学である。それは『碧巖録』の第五十五則の道吾一家弔慰という禅の公案の読解から現れてくる。若い僧侶である漸源は師である僧道吾と供にある不幸があつた家へ弔慰に行く。漸源は棺を叩いて「生か死か」と問う。道吾は「生ともいわじ死ともいわじ」と答える。漸源は帰りに再度道吾に問い、答えなければ打つと迫る。しかし道吾は答えず、遂に漸源は道吾を打つ。道吾が死去した後、漸源は兄弟子である石霜に事のいきさつを話すと石霜も同じく「いわじいわじ」と答える。ここに至つて漸源は悟りを得る。鍵となるのは「生ともいわじ死ともいわじ」という言葉と、道吾と漸源の師弟愛である。師は生と死の分別ではなく往相即還相の「生死交徹相転換」であるという真実を弟子に自ら悟らせようとしている。「絶対的真實」としての絶対無即愛を相対的存在者である人間が自覚するためには師による媒介が不可欠である。弟子

は師の愛を通じて真実を悟り、そして今度は悟った弟子が他者へと「絶対的真実」としての「絶対無即愛」を回施する。弟子は師の死後に生死の転換を真実として悟ることによって師を自身の内に復活させ、絶対無即愛の真実の自覚と同時に実存協同を実践している。⁽³²⁾このように田辺は公案を読み解く。プライベートな夫婦愛の共同体から基本的な骨格は維持しつつも、その内実は一層具体的になり、教育という要素が加えられている。渦動としての絶対無即愛において「生死相即転換」する実存協同は生者と死者が相転換する開かれた共同体であり、杉村靖彦が指摘するように絶対無即愛は「たえざる解放と革新」である。⁽³³⁾

しかし、どうして生者と死者ではなく、死者と生者の共同体なのだろうか。端的に言うとその存在の彼方にある超越的な絶対無で弁証法を展開するには「否定」を含んだ存在である死者の媒介が求められるからである。だが、この「否定」へのこだわりにはもう一つ理由があるのでないだろうか。田辺には原子力の「死の時代」、つまり核兵器で地球がいつ滅んでもおかしくない時代、に対して理想論で現状追認するのではなく、弁証法で否定し、変革しなければならぬという危機感がある。⁽³⁴⁾直接的な記述こそないが、ここに戦争を推し進めて多くの人間を死なせた重みで、そして特に戦争で死んでいった学生の重みで、平和へと時代を変革しようとする田辺の強い意志があるように思われる。

晩期田辺の死の哲学は、共に作り上げてきた共同体の歴史に形作られながらも同時に否定によって現状の変革へと向かう共同体の行為論である。この生者と死者の共同体は歴史性を真摯に担う一つのあり方であり、老田辺がこの強さを湛えた絶対無即愛の否定の弁証法を生きたという事実には非常に重いものがあるだろう。

五 九鬼の生の哲学

一方の九鬼の死者に対する見解は以下の引用に現れている。人生は無に取囲まれている。死は生の徹底的終局である。死の積極的意義を飽迄も悉知している人間でも、それ故に、時としては、歳月の推移に無限の哀愁を感じる。そして魂は死の鐘を聴くとき、自己の創造した価値が、たとへ僅少でも、不滅であるという諦念を懐いて、自己を無の淵へ突き落すであろう。(K、三、九九)

やがて私の父も死に、母も死んだ。今では私は岡倉氏に対しては殆どまじり気のない尊敬の念だけを有っている。思出のすべてが美しい。明りも美しい。蔭も美しい。誰れも悪いのではない。すべてが詩のように美しい。(K、五、二三八)

九鬼の「無」は完全な虚無であり、そこからは何も産み出されない。死は本当に終わりであり、そこに復活はない。⁽³⁵⁾死者は思ひ出として遠くから偲ばれるものでしかなく、それゆえに生の

充実と世界に成果を残すことが要請される。九鬼は自身の幼少時に父、母、岡倉天心の間のトラブルによる家族の崩壊と母の精神疾患発症を経験している。彼らに対して九鬼は様々に思うところがあるはずだが、「思出のすべてが美しい。明りも美しい。蔭も美しい。誰れも悪いのではない。すべてが詩のように美しい。」と彼らを強く美化する。死者は美しいものとして肯定されるのである。これこそが「善ではなく美」を選んだ九鬼の真骨頂である。九鬼夫妻と岡倉天心の間にあるのは不幸な邂逅であり、彼らの行為は普遍的な「善」の水準には適わないだろう。しかし九鬼は個と個の調和の水準である「美」でもって彼らを肯定する。田辺は理想論を現状追認であると批判するが、現状を受け止めて肯定するのは決して簡単なことではない。九鬼の肯定の意志は田辺の変革のための否定の意志に勝るとも劣らない重みを持った優しさである。

この偶然に成立した邂逅を受け止めて行為を形成していくこと、これが九鬼の生の哲学のスタイルである。

理想と現実との間に越ゆべからざる溝渠の横わることを自覚し、充されざることが祈願の本質なることを了得し、しかも善への憧憬に絶えざる喘ぎを持続することは、それ自身に絶対の価値をもっている。(K、三、一九六)

我々は偶然性の驚異を未来によって倒逆的に基礎づけることが出来る。偶然性は不可能性が可能性へ接する切点である。偶然性の中に極微の可能性を把握し、未来的なる可能

性をはぐくむことによって行為の曲線を展開し、翻って現在の偶然的な偶然性の生産的意味を倒逆的に理解することが出来る。「目的無き目的」を未来の生産に醸して邂逅の「瞬間」に驚異を齎すことが出来る。(K、二、二五九)

偶然を担い、偶然を受け止めるということは理想や善といった理念の実現を叶わぬものと認めることでもある。それでも理想に向かって行為することに九鬼は「絶対の価値」を見出す。未来は理想通りにはならないが、しかしそれを「目的無き目的」とすることによって現在の偶然性を倒逆的に基礎づけ、邂逅を享受することを九鬼は主張する。邂逅を受け止め、偶然と必然を美しく両立させて生きることが九鬼の哲学のモチーフである。九鬼の生の哲学は、孤独で一度きりで上手くないか人生を肯定する臨機応変な優しい哲学である。

六、結論 九鬼周造の生の哲学と田辺元の死の哲学 ——孤独の優しさと愛の強さ

田辺と九鬼はともに同一律の支配を退け、具体的な哲学を打ち立てることを目標にした。田辺は弁証法で現状を否定し高次で反復するという道を選び、死の哲学へと至った。九鬼は現状を肯定して個の個性を尊重しながら決して実現しない理想へ向かってそれでも行為するという道を選び、生の哲学を主張した。両者は共通する問題意識から始まりながら対照的な哲学へと進んだ。両者の哲学を次の表にまとめることができるだろう。

田辺	九鬼
死即復活	死んだら終わり
強い愛の共同体	孤独な個人の邂逅
現実を否定して絶対無即愛の弁証法で高次に反復する	現実を肯定し仮初めの理想へ向かって行為を形成していく
共同体の歴史性を担う	非連続の連続を受け止める
現状を変革する	偶然の現実を肯定する
善→愛	美

死者と間の歴史性を担って絶対無即愛の弁証法の方で現状を否定し、変革していこうとする田辺の哲学は愛の強さがある。一度きりの生における偶然の邂逅を受け止めて現実を肯定し、実現しない仮初めの理想へ向かって行為を形成していく九鬼の哲学には孤独な優しさがある。同じ時代の中でそれぞれの人生の困難と思索と実践を反映した両者の哲学はそれぞれに「否定の愛の強さ」と「肯定の孤独の優しさ」という核がある。

両者の対立を踏まえた上で、それでも両者の哲学をともに活かしながら新たな日本哲学を筆者は求めている。 「否定の哲学」 さえも活かす大きな「肯定の哲学」こそが私たちの探求すべき道ではないだろうか。

九鬼周造、田辺元のテキストは全集から引用した。

九鬼周造『九鬼周造全集』岩波書店、一九八〇—一九八二年。

田辺元『田辺元全集』筑摩書房、一九六三—一九六四年。

九鬼のテキストからの引用は（K、巻数、頁数）で、田辺のテキストからの引用は（T、巻数、頁数）で示した。引用に際しては新字・新仮名遣

いに改めている。

- (1) 例えば（T、一三、五二九—五三二）、（K、一、二二—二四）など。両者のテキストにはこの種の主張が頻出する。
- (2) 一九三八年に病床の田辺から贈られた短歌に対する九鬼の返歌が残されている（K、別、一四九—一五〇）。
- (3) 檜垣立哉『日本哲学原論序説』拡散する京都学派』人文書院、二〇一五年、七二頁。
- (4) 「〔前略〕：偶然性の問題は結局は宗教（広義の）へ行くべきものと考えて居ります。」（K、別—月報二二、二二）。
- (5) （K、別—月報二二、九—一二）。
- (6) （K、別—月報二二、九—一一）。
- (7) 書簡中で九鬼は、自分と田辺の主張はあまり変わらない、と返答し続けているのだが、それはあくまで九鬼の融和的な性格の表現であり、両者の違いは歴然としている。
- (8) 九鬼は田辺の否定的超越的合目的性は九鬼のいう「仏の本願力」の目的性と結局は余り変わらないのでは」と答えているが（K、別—月報二二、一二）、これは「遇うて空しく過ぐる勿れ」という命令によって「瞬間を生かしむる」という主張であるから（K、二、三二—三七）田辺の超越的無と比べるとごく弱い力しか持っていない。
- (9) （K、三、一七四）等。
- (10) 例えば「日本詩の押韻」（K、四、二二三—二五三）をはじめとする九鬼の押韻論は偶然の美を日本語の詩で表現する可能性を検討している。
- (11) （K、二、二五六—二六〇）。
- (12) 以下の拙論を参照のこと。織田和明「九鬼周造『偶然性の問題』における行為論『アルケー』」第二十六号、関西哲学会、二〇一八年、四五—五六頁。
- (13) 小浜善信「九鬼周造の哲学—漂白の魂—」昭和堂、二〇〇六年、二〇〇頁。古川雄嗣『偶然と運命 九鬼周造の倫理学』ナカニシヤ

出版、二〇一五年、一四二—一四三頁、一七二—一七九頁。

- (14) 田辺は「全く目的なき合目的性」を絶対無によって限定される善という意味で用いているが、九鬼はこの現実の偶然の成立を受け止めるといった意味で使っている(K、別一月報二二、一一)。

- (15) (K、別一月報二二、一一)。

- (16) 田辺元『懺悔道としての哲学 田辺元哲学選II』藤田正勝編、岩波文庫、二〇一〇年、九—三一頁。

- (17) 同書、二九頁。

- (18) 現在では「骰子一擲」もしくは「賽の一振り」と訳されることが一般的である。

- (19) 後述する死の哲学の基本モチーフと同じ構造をしており、そのパリエーションであるといえる。

- (20) (K、二、二〇九—二一一)。

- (21) (K、二、二〇七)。

- (22) (K、三、一〇一)。

- (23) マラルメの作品の主人公はいずれも非宗教的で孤独な人間であるから、加國尚志も指摘するように、田辺がマラルメの作品に「実存協同」という宗教的な愛の共同体へと向かっていく死の哲学を重ねることはやはり無理がある。死の哲学の十分な把握にはそれを直接論じたテキストの検討が欠かせない。加國尚志『沈黙の詩法—メルトロポソニイと表現の哲学』晃洋書房、二〇一七年、二二七頁。

- (24) ハイデガーを軸とした九鬼の哲学と田辺哲学の比較研究は紙幅の都合上断念した。

- (25) 一九五六年二月一二日付野上弥生子宛書簡。田辺元・野上弥生子『田辺元・野上弥生子往復書簡(下)』竹田篤司・宇田健編、岩波現代文庫、二〇一二年、一六一—一九頁。

- (26) (T、一三、一六八—一七二)。

- (27) 田辺・野上、前掲書、一五—二〇頁。

- (28) 同書、一六頁。

- (29) 同書、一八一—一九頁。

- (30) 加國、前掲書、二二七—二二八頁。

- (31) (T、一三、一六八) なお田辺は自身の関心に合わせて『碧巖録』第五十五則の一部だけを論じている。本稿でも、田辺が言及した部分だけを紹介している。

- (32) (T、一三、一六八—一七五)。

- (33) 杉村靖彦「死者と象徴—晩年の田辺哲学から—」『思想』第一〇五三号、岩波書店、二〇一二年、四七頁。

- (34) (T、一三、一六五) と (T、一三、六〇七—六〇八) を合わせて参照のこと。

- (35) 九鬼には永遠回帰論があるが、永遠回帰は全く同じ一生を無限回繰り返すということであるから、死後の世界の否定と矛盾しない(K、三、九八—九九)。

- (おだ・かずあき、日本哲学、大阪大学大学院博士後期課程)